

## 農村医学の将来像を思う

富山県農村医学研究会

会長 豊田 文 一

怪鳥のような羽ばたきをみせて、耕地の上を動きまわる巨大な機械に眼をみはった。これは大型農業機械である。無人である。遠隔操作により耕作より収穫まで全く労働力を要しない。これはある日テレビの映像に写し出された農業機械の偉大な進歩の一齣である。

もちろん医学の分野で、生体情報をテレメーターで遠くはなれて記録しうることは、すでに承知と思う。農業においてここまでくると、果して農業という印象が起るかどうか、工業的生産という考え方もでてくる。オートメーションという言葉が使い出されてから永い。30数年前私がこの農村医学に手を染めたころ、農業は手作り産業であり、農民は泥田にまみれ食糧生産にあけくれ、そこから起る健康障害は宿命的のものであり、これを如何に予防し健康な村を造るかが主要テーマであった。しかし日進み月移り、農業機械の普及は澎湃として起り、かつ社会環境、すなわち農村の都市化の急速な進展、若いすぐれた労働力の逃避などの結果による疾病構造にも大きな変革をきたしつつあることは事実である。

日本の可耕農地は少ない。農業従事者1名あたり耕地、樹園地の面積は(1970)平均0.5~1.0haの中間にある。これに対し西ドイツでは3.1ha、ソ連5.9ha、イギリスは10.4ha、アメリカは54.2ha、オーストラリアは実に103.5haである。最近農地の構造改善事業が行われたといえ、大型トラクターの駆使までは程遠い。この保有量も世界最下位であり、これに反して小型トラクターの保有は世界最高である。これをみても日本農業の実態が把握できるだろう。

ただ日本の農業の恵まれているのは温帯という気象条件である。いまかりにソ連をみれば農地の60%以上は北緯50度以北、北海道よりもずっと北にあり、きびしい自然条件の変化が大不作をもたらしている。またアメリカでは4%の労働人口で、あり余る農産物ができるのに、ソ連では全労働人口の1/3を投じてても、国民を養いきれない有様である。人間生存の必須条件は飢えないことである。それがためには食糧の確保である。日本では米はあまっているが、その他の大部分は輸入をあおいでおり、ソ連の如きは向う5カ年間アメリカより毎年700万トン程度の小麦、トウモロコシを買うという協定ができています。

さて話はもとにもどるが、テレビにもあるように農業労働の形態は将来おそらくその様相を変えてくるだろう。すなわち遠隔操作—オートメーション化した大型農業機械の導入により、農業構造の大革命を起すことは必至と予想される。いわば農地はたしかに存在する。しかし農村、農民の存在の意義は失われるかも知れない。

私どもは孜々として農村保健の問題に取り組んできた。しかし農村という実態が存在していたからである。「健康と疾病の背後にある地域社会」という理念からの農村は抹消されるかも知れない。日本農村医学会設立当時、この学会の存在意義を失うときこそ、本当の人類福祉が達成されるときであると同志と語り会ったことが思い出される。

以上私はさる日、テレビの映像にみいられながら思い浮かんだ偶感の一コマである。